

《研究論文》 専修大学と川島正次郎

車 田 忠 継
(二松學舎大学附属高等学校教諭)

はじめに

一八九〇年七月一〇日、東京市日本橋区浪花町に柳原正次郎と名付けられた男子が生まれた。この人物こそ、のちに川島家の養子に入り、最終的には自由民主党副総裁・専修大学総長を務めることになる川島正次郎その人である。

川島は一九一四年に専修大学専門部経済科を卒業し、内務省警保局に属官として採用された。この後、東京日日新聞（現在の毎日新聞）政治部記者、東京市秘書課、東京市商工課の初代課長、戦前は立憲政友会の衆議院議員、戦後は自民党の衆議院議員などを務めた。政府では、第二次鳩山一郎内閣の自治庁長官及び行政管理庁長官、池田勇人内閣の東京五輪担当国務大臣などを歴任する。党内では、岸信介内閣の幹事長、池田・佐藤栄作内閣期の副総裁、更に岸派離脱後は派閥の領袖として川島派を率いる。また専修大学の卒業生と言うこともあり、第二次世界大戦後は学校法人専修大学理事長・総長に就く。つまり川島正次郎なる人物は、政治史の視点のみならず、専修大学史の視点からも、十分に研究対象となり得る人物

と位置付けられる。

しかし研究の基盤となる一次的な川島関係史料の類に関しては、筆者が別稿で論じたように¹、現時点において、その所在が確認出来ていない²。つまり川島を巡る学術研究は、この史料状況もあってか、拙稿を除き³、皆無と言えよう。従って川島を論ずる際、屢々、川島正次郎先生追想録編集委員会『川島正次郎』（交友クラブ 一九七一年）・林政春『川島正次郎』（花園通信社 一九七一年）・小畑伸一『政界一寸先は闇―ある川島担当記者の手記―』（黄帆社 一九七二年）の三冊が引用されて来た。しかし何れも伝記部分は出典の明記と不明記、孫引きなどが混在しており、その引用には注意を要する。

以上の状況を受けた本稿の目的は、次の二つにある。第一は、筆者が川島関係史料の調査過程で出会い、川島の政治家としての側面のお話を伺った三人の人物、即ち川島を大叔父に持つその親族平山秀善氏、川島の秘書をその死まで務めた鈴木信也氏、毎日新聞社の政治部記者で川島番であった池浦泰宏氏、この三名と川島との関わ

りを紹介し、今後の川島研究に向けた展望を示すことである。この三名の方から伺ったヒアリング内容は、一九六〇年代の政治史に関する事柄が多いこともあり、別稿を参照されたい⁴。第二は、既刊資史料における川島本人やその縁者が語った箇所の引用等を軸として、戦前及び戦後の専修大学と川島の関わり方を総合的に明らかにすることである。既に、専修大学の歴史編集委員会編『専修大学の歴史』（平凡社 二〇〇九年）は川島を専修大学史の中に位置付けてはいるものの、その殆どは総長としての川島を描いたものとなっている。本稿は同書に学びつつも、学生時代の川島、川島と四つの附属高校の関わり等についても取り上げる。

1. 川島ゆかりの人々

（1）平山秀善氏

川島は一九二八年四月に妻の幸、一九三三年三月に長男の正孝を相次いで亡くした。この後暫く一人で過ごしたが、敗戦濃厚な一九四四年一二月、赤坂芸者の政子と結婚。一九七〇年一月九日に心臓麻痺で亡くなるまで、政子との間に実子を設けず、また養子も取らず、文字通り、夫唱婦随の生活を過ごした。そこで川島が目を掛けた人物の一人が、実姉平山（旧姓柳原）千代の子善司（川島の甥に当たる）であった。善司は川島から信頼を寄せられており、川島から金庫番を任せられていたと言う。なお善司は、一九六六年に我孫子市で開学する中央学院大学の運営法人（学校法人中央学院）第

写真一



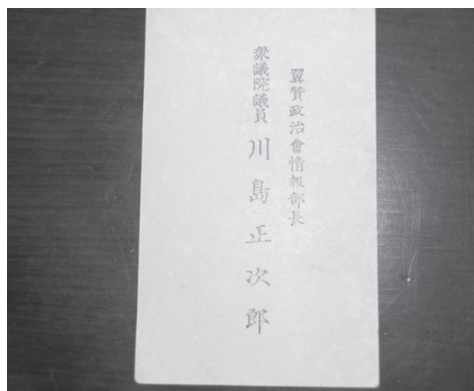
写真二



写真三



写真四



三代理事長を務めることとなるが、開学の際、川島が選挙地盤であった我孫子市の土地の取り纏めに当たった。この善司の次男が、今回、筆者が面会した秀善氏であり、川島を大叔父に持つ人物である。秀善氏は慶應義塾大学大学院在学中の一九九三年、新進党学生塾を創設するなど、生来から日本政治に携わる意思を持たれておられた。一九九五年と一九九九年には、千葉県我孫子市から県議会議員選挙に立候補したものの、二度とも落選。現在は、ノーネスチャネル代表執行役兼CEOを務めており、実業界に転身していった。二〇一二年三月五日、筆者は秀善氏と面会し、氏が直接、または親族や関係者から聞いた川島像の一端を伺うと共に、氏が所有されていた川島関係の資料の幾つかを拝見した。例えば川島愛用のメガネ（写真一）、議員バッジ（写真二）、翼賛政治会情報部長の名刺（写真三）、東京味噌醤油調味料配給統制組合・東京酒販組合理事長の名刺（写真四）、川島の二三回忌を機に作成されたVTR「政界一寸先は闇」などである。

（2）鈴木信也氏

前述の平山秀善氏に加えて、先に紹介した『政界一寸先は闇』の著者である小畑伸一氏（元サンケイ新聞社政治部記者で川島の番記者）からも紹介を受け、二〇一二年三月一〇日及び二〇一三年二月一日、筆者は川島の秘書をその死まで務めた鈴木信也氏と面会し、様々なお話を伺った。鈴木氏は一九三〇年千葉県生まれ。一九五三

年に中央大学法学部を卒業後、新聞記者であった父琢郎氏の影響を受け、同じく記者を志していた。しかし川島の衆議院議員選挙の手伝いをしていた大学時代の後輩より、千葉県知事から参議院議員に転出した川口為之助の選挙を手伝って欲しいとの依頼を受けたことから、政治の世界に携わることとなった。これを機に川口と親交を深め、また父琢郎氏が川口と親交があったこともあり、まず川口の秘書（当時の国会法では国会議員補助員と規定）となる。しかし一九五九年、川口が体調を崩して一期六年で政界を引退。その後は、同じく父琢郎氏が川島の知遇を得ていたこともあり、参議院議員の秘書から衆議院議員川島の秘書に転身する。加えて一九六〇年頃から五年間、自身がご結婚されるまでの間、川島邸で寝食を共にしており、まさに最も身近で川島を見聞していた方でもある。この五年間は、丁度、川島が党幹事長を務め、更には岸派を離脱して川島派（交友クラブ）を結成し、そして自民党副総裁に就任した時期に相当する。なお鈴木氏以外の秘書としては、『政治と教育の一体化―川島先生を偲ぶ―』（川島先生を囲む会 一九七一年）の著者である村田栄吉氏、主に派閥業務を担当された根本米太郎氏、第二秘書の内藤正典氏（専大卒業生）がおられたと言う。

（3）池浦泰宏氏

一九三六年、北九州市生まれ。一九六〇年に早稲田大学卒業後、毎日新聞社に入社。静岡支局に配属されたが、一〇ヶ月で本社に呼

び戻され、政治部に配属された。特に自民党の中でも中間派を担当し、川島派の番記者になった。川島以外にも、同じ川島派の椎名悦三郎（官房長官・外務大臣・自民党副総裁などを歴任）や赤城宗徳（防衛庁長官・農林水産大臣などを歴任）とも親しかった。池浦氏は、先に紹介した『川島正次郎』の川島小伝部分を担当した方でもある。また「椎名悦三郎秘録」を全一五回に渡り『サンデー毎日』（二九七九年一月四日号～一九八〇年二月一七日号）に連載されており、川島とその派閥を継承した椎名の実像に触れていた人物の一人でもある。二〇一二年三月一五日、筆者は池浦氏と面会し、川島や椎名に関して様々なお話を伺った。なお池浦氏は毎日新聞社を政治部副部長で退職された後、現在は社団法人日本外交協会理事長を務めておられる。

2. 専修大学と川島

（1）学生時代の川島

川島が高等教育機関としての専大を選択した経緯、また彼の専大卒業に関しては、専大弁論部同期生の垣屋忠次郎（のち御岳登山鉄道社長）の回想が最も詳しい⁵。一九〇五年、川島は日本橋の久松小学校高等科を卒業後、内務省の雇員（筆生）を務めながら、「英語を全く知らざる者の為に特設し速度を緩め普通科より低度の教科書を用ひ初歩の英語⁶」を教授する正則英語学校（現在の正則学園高等学校）に加えて、神田永富町の中等夜学校⁷に通学して「算

数の勉強を⁸」した。ここで垣屋と川島は出会い、以後、交遊を深めることとなる。川島と垣屋は中等夜学校在学中、「政治家か実業家になって、今少し、希望の持てる生活を営むべきだと痛感」し、専大卒業生の藤田茂一郎⁹の意見を聞き、一九一二年四月、二人揃って専大に入学した。

当時の専大の正式名称は、一九〇三年三月の専門学校令に基づいた「専修学校」。川島が入学した翌年の一九一三年七月に学校名を「私立専修大学」と変更したものの、あくまでも法制度上は専門学校であり、学位授与権などの大学としての特権はなかった。「私立専修大学」が一九一八年二月公布の大学令に基づく大学に昇格・認可されるのは、川島卒業後の一九二二年五月を待たなければならなかった。

さて昼間に内務省雇員として勤務していた二二歳の川島は、退勤後に夜学の専大専門部経済科で学ぶと言う二束の草鞋の生活を過ごした。特にその学生生活を語る上で、雄弁会（弁論部）での活動は見逃せない¹⁰。雄弁会は一九一二年、在学生の伊藤利三郎や座田重孝らの要請を受けて、当時、貨幣論を講じていた青木得三（のち中央大学教授）が部長を務めたことに始まる。川島は「青木先生の授業の影響で入部し¹¹」た。弁論部の同級生の黒川鍋太郎（のち株式会社下村組相談役）が「きょうは日大、明日は明大と日曜、土曜の楽しみでした¹²」と回想したように、周辺大学と弁論を戦わせるなどして盛んに活動していた。また同じく黒川が川島の弁論を「在学

中『帝國主義か非帝國主義か』と題し、各大学専門学校連合演説会でやったものは、内容の充実した立派なものであった¹³と評したように、川島は現実の政治課題を強く意識したテーマを選んでいった。専修大学における川島の学生生活は、将来の代議士としての素養形成に大きな役割を果たしたと思われる。

とは言え学業との両立は厳しく、川島は専大弁論部の同級生である坂本甲午郎（のち大蔵官僚）に対して、「このごろ役所が非常に忙しくなった。とても卒業まで通いきれないので、この際、学校をやめようと思っている¹⁴」と述べた程であった。専修大学松戸高等学校第二代校長の高田善之によれば、川島は「学校から人形町の自宅への帰路、歩きながら眠¹⁵」っていた程、業務と学業に忙殺されていたと言う。しかし坂本が「いま学校をやめては卒業が出来ないだろう」と川島を説得した。そこで前述の黒川が「他の大学で発行している講義録などを読むことをすすめ¹⁶」ると共に、前述の垣屋は「いつか『専大卒』という肩書きが要る時期が必ずあると考¹⁷」え、卒業試験に際し、「私の整理されたノートを熟読させ¹⁸」ることなどによって、「なんとか卒業試験を（中略）卒業者五十三名の中五十二番で」やり遂げさせた。一九一四年三月専大卒業という川島の学歴は、弁論部の同級生の協力があってこそのものであった。

従って専大卒という学歴は、川島の中に際立つ愛校心を惹起せずにはいられない。前述の垣屋の「『専大卒』という肩書きを（中略）立候補、当選、大臣就任、叙勲などその他諸々の場合に使われ

ている。しかしそれによって母校の専修大学の名声もあがり、われわれ同窓生としても肩身の広さを感じる」との回想からは、折に触れて「専大卒」を掲げる川島の愛校心の存在が伺えよう。

（２）卒業後の母校との関わり

専大を卒業してからその経営陣に加わる迄の間、川島と母校との関わりの事例として、次の二つを挙げよう¹⁶。第一は、一九二二年九月三日に開催された第四回「専修帝国議会」で内務大臣役を務めたことが象徴するように、現役の専大生と何らかの交友関係を持っていたということである。専修帝国議会とは「模擬国会¹⁷」であり、政党を模倣した学年単位が内閣を組織し、そこに校友や教員が参加する。そして首相や閣僚に扮した学生が施政演説を行い、これに対して野党が質問演説に立つのであった。なお当時、東京市商工課長の職にあった川島は、理由は不明だが当日欠席した。この模擬国会は、参加者が政治に関する知識を学び、弁論技術を身に付けると言う意味で、格好のイベントになったことは間違いないだろう。

第二は、川島が専大の現役学生や卒業生を自身の選挙戦に動員していたということである¹⁸。例えば一九四九年一月の第二四回総選挙で当選した衆議院議員の松井政吉（社会党）は、専大在学中の一九二八年二月、川島の第一六回衆議院議員選挙（第一回普選）を手伝った時のことを「弁論部の人々とともに千葉県第一区の先生の選挙区に応援に出かけたが、もちろん私たちのしゃべることはなんで

もかまわない。演説会場の段取り準備と本物弁士の来るまでの前座とつなぎであり、学校の先輩川島先生によりしくお願いしますだけ忘れなければよかった。いま考えると随分、無責任だったと思う。そして選挙区である千葉県一区の浦安という太平洋岸から我孫子市などの利根川べりまで各町、各村を歩いた¹⁹と回想し、在りし日の川島との思い出を語った。

以上の二つの事例から、川島が弁論部を中心とする現役学生との人脈を築いていた点、その人脈を衆議院議員選挙に動員して戦前期の選挙を戦い抜いた点などを読み取れる。しかも川島の選挙と専大の関わりは、戦後も続いており、例えば川島秘書の村田栄吉の「奥様を代理に、事務所に、長年の政友松本栄一先生を初め、大学の森口理事長や、渡辺船橋市長、染谷県連幹事長その他強力な有志と、大学生まで応援にかけつけ²⁰」たとの回想は、それを物語る。専大を軸とした川島の人脈は、戦前・戦後を通して、彼を衆議院議員に導き続けた一つの大きな力だったと言える。

(3) 母校への凱旋

一九五三年五月、社会党右派衆議院議員の鈴木義男学長が兼任していた学校法人専修大学理事長職に、改進黨(自由民主党の母体の一つ)衆議院議員の川島が就任した。一九六四年八月までの約一年間、理事長職を務め、その下では前述の鈴木義男・木村国治・小林良正・相馬勝夫が学長の任にあった。更に一九六一年一〇月から

逝去する一九七〇年一月までの約九年間、総長を務めた。いわば一七年間にも及ぶ川島時代の幕開けである。

この一七年間、専大は生田キャンパスを整備すると共に、経済学部・法学部・経営学部・商学部・文学部を設置した。更に伊勢原グラウンドを開発・整備したことに加えて、後述する四つの附属高校を持つなどに至った²¹。川島時代は、現在の専修大学の原型が形成されたといっても過言では無い。それは、川島が川島派(交友クラブ)領袖や党副総裁として政界に確固たる地位を築いた時期と軌を一にする。

一七年間にも及ぶ川島時代を語る上で見逃せないのが、学長相馬勝夫(専大創立者の一人である相馬永胤の孫)と共に「トロイカ体制²²」の一翼を担った理事長森口忠造の存在である。森口と川島の最初の出会いは、一九三二年第一八回総選挙の時、やはり弁論部の学生だった森口が専大弁論部を率いて川島の応援に駆け付けた頃に遡る。川島がこの選挙に当選して以降、森口は大森の川島家に書生として住み、一九三三年の専大専門部経済科卒業後は「川島が保証人になり²³」、かつて川島が勤めた東京日日新聞に入社した。その後、森口は毎日新聞社事業部長や大阪毎日ホール専務取締役などを歴任し、一九六四年九月、川島の後任理事長に就任した。川島の「教学精神の遺鉢を継」ぎ、川島に対する「敬慕の念の深い」森口²⁴は、総長川島との思い出として、次の二つを回想する²⁵。一つは、一九六六年の卒業証書に対して、一部学生が川島の署名拒否連

動を展開した時のことである。川島は「左翼学生の反対運動であったとしても、卒業証書に少しでも疑義を抱く理由があればこれを取り入れ、名目にこだわらず署名を抜け」と述べ、なおも署名削除に反対する森口に対し、「大学にはいろんな考えをもっている人々がいることに思いを致し今後の大学運営に当たるべきである。総長署名を取れ」と命じたと言う。このような対応を取ったからこそ、「ボクは自分の大学に、もし学園紛争が起きたら学校を閉めてしまいうよ（中略）ふだん学生達を食いものになっているから、いざという時には文句がいえないんだ²⁶」と述べるなど、学生対応には絶対の自信を持っていた。もう一つは、一九六〇年代後半の全国的な大学紛争の最中の時のことである。一九六九年五月から六月にかけて、専大神田校舎と生田校舎で一部学生が破壊行為に及ぶ中、機動隊が突入し、逃げ遅れた三六名の学生が不退去罪などで逮捕されるなど、専大にもその波は押し寄せていた²⁷。この時期、川島は「大学という処は教育の場で、生の政治活動は許されない。ここを考えることが大切なんだ。そして自ら信念をもって行動せよ」と学生に語り掛けることに終始した結果、デモに参加した学生生活家は僅か三〇名しか数えなかったと言う。この政治活動を大学に持ち込まない態度は、学長相馬勝夫が「専修大学の自由中正の学風を尊重され、なまの政治活動を学内に持ち込むようなことは一切なさいませんでした²⁸」と回想した通り、川島の中で一貫したものであったと言えるよう。

このような大学紛争の最中に理事長を務めた森口に対して、川島は全幅の信頼を寄せていた。例えば前述の松井政吉が弁論部の一年後輩の森口に関して「川島先生は森口さんに国会議員になることをいく度とすすめられ、私にも話されたのですが、その都度反対をし、森口さんは国会議員になるよりは大学のために努力されることが望ましい²⁹」と回想するように、川島は彼の国会議員への転進を模索していたようである。しかし川島夫人の政子は、森口が「政界への道を志すことについて、川島は一貫して賛成いたしませんでした。むしろ、自分の後継者として専修大学の理事長に専念され、大学の発展に当たっていただくことを強く望んでおられました³⁰」と回想しており、一致していない。何れにせよ、川島秘書の鈴木信也氏が「師弟関係」と回想するように、川島と森口は強い絆で結ばれていたのである。

（４）専修大学の存在感を高めるために
前述の通り、同級生の援助で専大を卒業したこともあったのだろう。川島の大学への愛校心は、人一倍強かった。だからこそ自身の番記者を一度は専大の入学式や卒業式に誘い、出席させていた。産経新聞政治部記者の小畑は「川島は、母校の総長に推されたことが誇りでもあり、母校自体を見せたくてならなかった³¹」と回想する。その入学式や卒業式の式典においては、必ずと言って良い程に卒業生であることを強調する。例えば一九六八年四月の入学式祝辞

において、理事長の森口が自身を専大卒と述べなかったのと対照的に、川島はそのことを二度も強調した³²。だからこそ自身が身を置く政治の世界に関して、前述の松井政吉に「専修大学出身者は東大や早稲田にくらべて数が少ない。党は異なっても国家のためにお互いに母校に恥しくないような活動をしようじゃないか³³」と述べたように、専大卒の政治家の少なさが気になっていた。

そこで川島は専大の社会的存在感を高めるために、主に次の二つの方法を取った。一つは政治の世界で専大の名称を遠慮無く使うことである。例えば一九五七年七月、川島は岸信介内閣の党幹事長に就任する。秘書の村田栄吉によれば、川島は「幹事長就任に当って」という題の原稿を村田に代筆させた際、原稿の「『私は某大学の理事長を務めている』との項で『某』を消して『専修』と書入れられた。その外に『君これよい、よくできている』と喜んで下された³⁴」と言う。結果、実際の原稿は、「私は専修大学の理事長を務めているので、青年の心氣にふれて、その将来を常に期待する実感を持つております。今後とも学制の改革を初め、文教政策などの青年対策を強化して、よりよい青年を育てたいと思っております」となった。川島が専大卒業生であることを誇り、遠慮せずに政治の場でもそれを述べ、専大の社会的存在感を高めようとした意図が読み取れよう。

もう一つは、体育会に関与することである。例えば川島は専修大学体育会名誉会長も兼任した。岡部友昭（専修大学体育会委員長）

によれば、毎年四月の「体育会の各部の代表者の集まる会議では、各部に戦績とか、今後の予定などを楽しそうに聞いて³⁵」いたと言う。従って野球部の公式戦は都合の許す限り観戦し、「決して貴賓席に坐らず、学生たちの真中に陣どって、ピンチにもチャンスにも手を打ち、声をかけて一喜一憂³⁶」した。また在学生の小磯正雄が「ことにスポーツ面に対する先生の力の入れようは論外であり、どれ程励みになったか知れません³⁷」と回想するように、川島は大学スポーツの持つ社会的影響力の高さを熟知していたからこそ、前述の通り、在任中に伊勢原グランドの整備に取り組んだと言えよう。更に川島は、日本学生卓球連盟会長への就任を依頼された際、「私は自由民主党の副総裁としてではなく、専修大学の総長としてお引受け致します³⁸」と明言し、政治とスポーツを混同せず、自覚的に一定の距離を取ろうとしていたと思われる。

3. 四つの附属高等学校と川島

（1）専修大学附属高等学校

専大附属は、小池茂實が一九一五年四月に設立した私塾商工学舎に始まる。商工学舎は幾多の変遷を経て、一九四八年時点において、財団法人京王学園（京王高等学校・京王中学校・京王幼稚園（一九六九年廃止））となっていた。しかし第三代校長の中岡勝人が「時恰も生徒急減期に当り、私立学校危機に遭遇（中略）昭和二八年頃より再三の理事会が開かれ、その打開策として、専修大学の

援助」を受けるに至ったと回想するように³⁹、京王学園は経営難に陥り、専大にその救済を求めていた。

そもそも川島秘書の村田によれば⁴⁰、専大理事長を務めた川島のもとには、「経営に困っている学園からは、しばしばその救済、再建について相談」が持ち込まれており、川島は「熱心に、その真相と方途を研究」したと言う。川島のもとにこの相談を持ち込んだ学校の一つが、京王学園であった。川島は千葉市立小学校で校長経験のある村田に「君の学校経営の経験から、一つ京王学園の再建に、力を入れてくれたまえ、僕アあそこを何としても、よい学園にしたい」と述べ、その再建にも関わることとなる。その結果、一九五五年には学校法人京王学園（専修大学附属京王高等学校・専修大学附属京王中学校（一九六九年廃止））、一九六〇年には学校法人専修大学附属高等学校（専修大学附属高等学校）がスタートした。専大にとって、初めての附属高等学校であった。

（2）専修大学松戸高等学校

専大松戸は他の三つの附属高校とは決定的に異なり、一九五九年四月、ゼロから開設に至った学校である。一九四三年市制施行当時七、一九八人だった松戸市人口は一九五九年時点で七八、九三七人と一〇倍となったにも関わらず、県立松戸高等学校しか無く、松戸市長の石橋與市も財政的に市立高等学校の設立が難しい今、私立高等学校の誘致を模索していた。青木美智男によれば、松戸市の窮状

を見かねた市内在住の専大卒業生が間に入り、専大に高等学校誘致を打診したと言う⁴¹。専修大学が中等教育に関わることが出来たのは、前述の専大附属同様、やはり卒業生と言う存在がいたからこそであった。

川島は、学校法人専修大学松戸高等学校の初代理事長を兼任した⁴²。従って他の三つの附属高校とは異なる形で専大松戸と関わっていく。例えば一九六〇年二月に創刊された学校新聞「専修松戸新聞」の中で、川島は以下の祝言を添えた⁴³。即ち「松戸市民の熱心な要望」の下に専大松戸が開校されたとその経緯を説明した上で、本校が「教育の双壁」である「立派な先生に来て貰ってよい教授陣」と充実した「教育環境」の伴った学校であることを自負した。だからこそ開校後は、生徒に「よい校風の樹立」のため、「知徳をみがき、良識を強めるため一意専心勉学に励む」ことを望む。そもそも専大松戸は「私のスローガン『政教一致』を実現する一地盤」であるがゆえに、「強い責任感とあつい愛情が湧く」と述べているのである。ここからは高等教育に加えて、川島の中高等教育への熱意を読み取れよう。

しかし開校後、生徒総数が伸び悩む。専大松戸完成年度に当たる一九六一年四月現在、一年生一二五名・二年生二七〇名・三年生一七七名の計五七二名で、全募集人員一、〇〇〇人の五七・二%しか収容していない現状であった⁴⁴。そこで同年七月、川島は秘書の村田栄吉に対して、「全学年で総数が五七〇なんだヨそれで僕ア毎月

百万円宛、そこに出してるんだ、一つ生徒を増やして、立派な学校にして貰いたいんだ⁴⁵」と述べ、自身が赤字を補填している専大松戸高校の挺入れを依頼した。村田は国会と学校、一日交代の勤務で、主として生徒募集に奔走したと言う。また教職員の奮闘の結果、初めての卒業生の進路結果も堅調（専大五五名・千葉工業大学・川島正次郎が理事長）二名・他大学及び学校二四名・就職八八名）だった。その結果、新一年生は七九四名を数え、村田は川島から「新入学七五〇人、よく入ったものだ、之で一安心、村田君よくやってくれた」と労いの言葉を掛けられた。こうして専大松戸の経営は軌道に乗り、現在の隆盛に繋がっていくこととなる。

川島はこの専大松戸に対して、他の附属高校とは異なる愛着を見せた。例えば川島秘書の村田が「一日おきに専大松戸高校を見⁴⁶」ていたと回想したように、自民党副総裁に就任してからも、第二代理事長を森口に譲ってからも、頻繁に専大松戸に足を運び、専大松戸の教職員や生徒との接触の機会を多く持った。専大松戸第二代校長の高田善之の「生徒がよくなった話などを聞くときには、大変、喜んでおられました。また生徒に接することをとくに喜んでおられたとみえて、慈父のような温顔でした。記念館にある先生のニコニコしたお顔のお写真は、文化祭の際書道室で生徒に接しておられたときのものである⁴⁷」との回想は、それを物語ろう。しかも秘書の村田の回想にあるように、川島は学校運営にはタッチせず、「一切、高田学校長を信頼し同氏に任せきり」で、その死まで専大松戸

を見守ることとなる。

（3）専修大学北上高等学校

専大北上は、澤田末次郎が一九五〇年に設立した岩手洋裁専門学院に始まる。一九五一年に黒沢尻女子高等学校、一九五七年に北上商業高等学校と改称し、川島総長時代の一九六一年に専修大学北上高等学校となり、現在に至る。北上高等学校の場合、中学生の子を持つ岩手県在住の校友白藤理治郎が他の校友と共に、専修大学理事の依光好秋と津田秀登に専修大学附属高等学校の誘致を申し出たことが契機であった。専大松戸と同様、卒業生の存在が大きかったのである。川島の関わりについては、この問題を審議した一九六〇年一月七日の理事会における「三人の理事が行って良いと云うのだし、積極的には反対にならないから話にのる」との発言、一九六一年三月一四日の理事会における「種々の問題がある、金融が難、すぐ出来ぬ。労力出資は考えないわけにはゆかぬ。大体認める」との発言が確認出来る⁴⁸。

（4）専修大学玉名高等学校

専大玉名は、専大卒業生の元田繁實が一九四九年に設立した玉名英学院に始まる。一九五三年に玉名高等学校と改称し、一九六六年に専修大学附属玉名高等学校となり、現在に至る。管見の限り、前述の三つの高等学校の場合と異なり、川島の関与は見出せなかつ

た。但し一九六八年四月一四日、川島は同校を初めて訪問し、総長先生歓迎式が開催された。川島は専修大学の歴史、建学の精神について説明した上で、『質実剛健』『誠実力行』の観念をしっかりと身につけさせて、しかも学問的にも、他の高等学校に劣らないような生徒を養成し、高等学校、大学一貫して教育をすることが必要だという考えから（中略）多少の実績を持っている玉名商業高等学校を専修大学の附属に編入してこれに力をいれること⁴⁹になったと述べた。現在でこそ、私学の多くが高大一貫教育を展開するが、それを一九六八年段階の時点で明言した点に、川島の先見性が示されよう。

おわりに

以上、専修大学と川島の関わりを総合的に見た。専修大学で学生時代を過ごしたからこそ、川島は衆議院議員選挙で連統一四回当選を果たすだけの力の源泉を手に入れ、最終的に自民党副総裁に登り詰める。また、その過程で専修大学総長に就任し、現在の専大の原型を築き上げる。つまり専修大学と川島正次郎は、お互いに相互補完的・一体的関係であった。これが本稿の結論である。

勿論、専大における川島時代の全てが賞賛し得るものであった訳では無からう。既に明らかにされたように⁵⁰、特に一九六〇年代後半の新規事業、即ち前述した附属高校設立や短大新設などに伴う多額の財政負担に対し、川島総長・森口理事長・相馬学長のトロイカ

体制は学費値上げで対応しようとしたため、教授会が危機感を抱くと共に、学生の間では不満の声が高まっていたと言う。確かに一九六九年時点で「近い将来専修大学に宗教科を設置したいと思っている。これは、職業的宗教人の養成を主目的とするものでなく、宗教を理解することによって、学生がより高い知性と精神を把握してくれることを期待するからだ⁵¹」と述べたように、川島は更なる大学の拡大路線を志向していた。しかし生前、「政治生活をやめた後は大学教育に専念するつもりだ⁵²」と述べたように、彼の大学教育への熱意が人並みならないものであったことは、疑い無い。

果たして川島は、専修大学の学生に何を求め、政界引退後に専念する筈の大学教育に、どのような理想を描いていたのであろうか。それは、以下の二つの卒業式における川島の祝辞に凝縮されているように思われる。一つは、一九六八年三月の卒業式における「われわれ人類の最大の使命は、この社会をさらに平和な豊かな、文化的のかおりの高い、よりよい社会をつくり上げて、次の時代の国民に引き継ぐということが、人類の仕事であります⁵³」と言う祝辞である。もう一つは、一九七〇年三月の卒業式における「泥にまみれた著名人になるよりも、善良で愛と親切に徹した社会人として立派な社会づくりに参加して欲しい⁵⁴」と言う祝辞である。つまり川島は、善良・愛・親切を体現した一人の人間として、平和で豊かな文化的な社会の構築に寄与し、その社会を次代に引き継ぐような人物であること、これを専修大学の卒業生に求めたのではないだろう

か。しかし川島は一九七〇年十一月九日午前一〇時二〇分、持病の喘息による心臓発作で八〇歳の生涯を終え、それを見届けることが出来無かった。秘書の鈴木信也氏によれば、「本人は八八歳で政治家を引退する積り」であつたと言うから、自身も予期せぬ早い死であつたことは間違い無い。

専修大学は、今年創立一三三年を迎える日本有数の私立大学の一つである。現在の専修大学には、川島記念賞など、川島の名を冠するものが残っている。その意味において、相互補完的・一体的関係である専大と川島を重ねて検討することは、決して小さくない意義がある。川島の死から四三年を迎えた今、彼の想いが具現化されたか否かは、ひとえに筆者を含めた全国に散在する卒業生二四七、一七四人（二〇一二年四月一日現在△石巻専修大学及び専修大学北海道短期大学を含めると二六九、六一〇人▽）の活躍に因るのではないだろうか。

（付記）

史料の閲覧に際して、専修大学松戸高等学校司書教諭の岡安宗仁氏にお力添えを頂いた。記して感謝の意を表す。

1 拙稿「川島正次郎」（『近現代日本人物史料情報辞典』第五巻 刊行予定）

2 『IWW—世界産業労働者団—』（一九二〇年 清水書店）は、

川島唯一の著書である。同書は、一九一八年に後藤新平のポケットマネーで渡米した川島が「労働問題解決の岐路に立つて居る時代に於て之を究明して革命思想と破壊的運動の防遏を謀る」（三頁）ため、その参考としてアメリカの「実際上のIWWを紹介したもの」（四頁）である。同書からは、戦前期内務官僚の労働問題認識を伺えよう。

3 中村政弘「ナンバー2に徹した政治家・川島正次郎」（『千葉史学』第二〇号 一九九二年）は、川島の戦前及び戦後の概略的な歩みを俯瞰した論考である。しかし余りにも川島の政治歴が長く、紙幅の都合もあつたのだろう、依拠史料を明示せず、その全体像をスケッチすることに留まっている。そのような中、拙稿「一九二四年第二五回総選挙と川島正次郎—東葛飾郡における護憲三派候補の実像—」（『市史研究いちかわ』第四号 二〇一三年）は、初めての出馬となつた一九二四年第一五回総選挙における川島の選挙戦（しかし落選）の実相を分析したものである。

4 拙稿「戦後政治史の中の川島正次郎—一九六〇年総選挙と川島派の誕生を事例に—」（『研究紀要』第二二集 二松學舎大学附属高等学校 二〇一三年）は、本稿で紹介した川島ゆかりの三名の方々のインタビューや国立国会図書館憲政資料室所蔵『椎名悦三郎関係文書』や『藤山愛一郎談話速記録』などに依拠しながら、一九六〇年総選挙と川島派誕生過程を分析することによって、川島が政治家として大成する契機を明らかにしたものである。

5以下、垣屋の回想に関しては、特に断りの無い限り、垣屋忠次郎「役に立った専大卒の肩書」(前掲『川島正次郎』七一〜七四頁)。
6大生川志郎『最新東京夜学校案内』(教成社 一九二一年) 一二八頁。

7三上敦士『近代日本の夜間中学』(北海道大学図書刊行会 二〇〇五年) 三七頁によれば、一九〇五年時点で神田区に存在した夜学校は、私立中等夜学校・私立開成夜学校・私立中等国民夜学校の三校であった。この何れかに川島は通学していたと言うことになろう。

8川島正次郎「私の政治歴」(『人生この一番』学芸通信社 一九五九年) 一二二頁。この史料は川島唯一の自伝だが、これに対して川島は「あたしや、こういったもの、存じませんがねえ。ずいぶん上手にできているじゃございませんか」(草柳大蔵「新・実力者の条件六 “江戸前フーシェ”・川島正次郎」入『文芸春秋』一九七〇年一月号)と述べている。恐らくインタビュに答えた川島の言葉が、何らかの経緯で記事に転化されたのであるう。

9藤田の詳細は不明だが、のちに三六倶楽部と言う在郷軍人の組織に所属し、国体明徴運動に関与すると共に、一九四二年東京市会議員選挙に神田区から推薦候補として当選する。この時、藤田が川島と垣屋にどのような話をしたかは判然としない。

10『専修大学一二〇年 一八八〇―二〇〇〇』(専修大学出版局

一九九九年) 一五四頁によれば、弁論部OBで国会議員になる者としては、松井政吉(社会党)・鈴木周次郎(日本民主党)・中村庸一郎(自民党)、更には第五代理事長の山下徳夫(自民党)などがいた。

11『専大雄弁 五十五年の歩み』(専修大学雄弁会 一九六七年) 一〇頁。

12前掲『専大雄弁』一〇頁。

13黒川鍋太郎「思想家川島総長」(前掲『川島正次郎』九七頁)

14以下、坂本と黒川の回想に関しては、特に断りの無い限り、前掲林『川島正次郎』三二〜三三頁。

15高田善之「慈父」(前掲『川島正次郎』一四三頁)。

16その他、川島は一九二〇年九月、私立専修大学の大学昇格運動に校友(卒業生)として関与した。前掲『専修大学の歴史』一三三〜一三五頁を参照。

17前掲『専修大学一二〇年』四八頁。

18川島の初めての衆議院議員選挙に関しては、前掲拙稿「一九二四年第一五回総選挙と川島正次郎」を参照。

19松井政吉「もっと教えを受けたかった」(前掲『川島正次郎』二四七頁)。

20前掲村田『政治と教育の一体化』六一頁。

21秘書の村田栄吉は「週に二日、大学で理事長直属として、グラウンド開発をやって貰いたい」(前掲村田『政治と教育の一体化』八

二頁）との依頼を受けて、地元役場・自衛隊・県庁などとの折衝を担当したと回想する。

22 前掲『専修大学の歴史』二五五頁。

23 『追想森口忠造』（森口忠造先生追想録刊行会 一九八九年）三五頁。

24 前掲村田『政治と教育の一体化』八二頁。

25 以下、森口の回想に関しては、特に断りがない限り、森口忠造「身をもって教えた民主主義」（前掲『川島正次郎』二八五～二八七頁）。

26 前掲小畑『政界一寸先は闇』二四九頁。

27 『ニュース専修』号外（一九六九年六月二一日）。

28 相馬勝夫「学生の良き理解者―川島総長」（前掲『川島正次郎』一三七頁）。

29 松井政吉「長い長い友人」（前掲『森口忠造』二八七～二八八頁）。

30 川島政子「うらやましい師弟関係」（前掲『森口忠造』一五六頁）。

31 前掲小畑『政界一寸先は闇』二四九頁。

32 『ニュース専修』第一号（一九六八年）二～三頁。

33 前掲松井「もっと教えを受けたかった」（前掲『川島正次郎』二四七頁）。

34 以下、幹事長就任挨拶の回想に関しては、特に断りのない限り、村田『政治と教育の一体化』三六～四〇頁。

35 岡部友昭「川島先生の偉大さ」（前掲『川島正次郎』六三頁）。

36 前掲小畑『政界一寸先は闇』二四九頁。

37 小磯正雄「川島先生の愛校心と愛国心」（前掲『川島正次郎』一〇五頁）。

38 清水斉「最高の川島旗授与」（前掲『川島正次郎』一一九頁）。

39 『専修大学附属高等学校五十年誌』（一九七九年）二四頁。

40 以上、専大附属高校を巡る回想に関しては、前掲村田『政治と教育の一体化』八〇頁。

41 以上、創立五十周年記念誌刊行委員会編『専修大学松戸高等学校五〇年のあゆみ』（専修大学松戸高等学校 二〇一〇年）五〇～六三頁。なお、石綿豊大「専修大学松戸高等学校における年史編纂作業の中間報告」（『専修大学史紀要』第二号 二〇一〇年）は、同校図書館に設置された川島記念室を紹介している。筆者がその設置経緯を川島秘書の鈴木信也氏に伺ったところ、「その存在をはじめて知ったし、そもそも設置には関与していない。恐らく川島夫人の政子氏が川島の書物や品々の一部を寄贈したのではないか」と指摘された。

42 専大松戸を学校法人専修大学と別法人とした背景に関しては、前掲『専修大学松戸高等学校五〇年のあゆみ』一〇四～一〇七頁。

43 以下、祝言に関しては、特に断りのない限り、前掲村田『政治と教育の一体化』四一～四四頁。

44 以下、専大松戸に関しては、特に断りの無い限り、前掲『専修大学松戸高等学校五〇年のあゆみ』一二二頁。

45 以下、専大松戸に関しては、特に断りの無い限り、前掲村田『政治と教育の一体化』八一～八三頁。

46 前掲村田『政治と教育の一体化』二七頁。

47 前掲高田「慈父」(前掲『川島正次郎』一四四頁)。

48 北上学園編『北上学園三十年史』(北上学園 一九八二年)二二～二四頁。

49 『専修大学玉名高等学校三十年史』(専修大学玉名高等学校 一九九八年)一六一頁。

50 前掲『専修大学の歴史』二六〇頁。

51 慶野聰郎「先生と宗教」(前掲『川島正次郎』一〇二頁)。

52 常松栄「政治生活をやめたら…」(前掲『川島正次郎』一六六頁)。

53 筆者蔵(鈴木信也氏提供)「昭和四十三年三月二十一日卒業式祝辞 草稿」。

54 前掲小畑『政界一寸先は闇』二五四頁。